

おります。

## 北支独立山砲第一大隊 軍歴で得た人生态念

福島県 青山 忠之助

大正十一年三月二日、福島県河沼郡会津坂下町に生まれ、昭和十四年三月二日、会津農林学校卒、同年四月一日付をもって北海道庁拓殖部地方林課に勤務を命ぜられていたが、現役入隊のため退職しなければならなかった。(兵役は国民の義務であるので、現役入営は退職となる)

翌年、仙台の野砲兵第二連隊に入営、陸軍二等兵となる。入営をしてから軍隊での体験で心に残ることは、軍装を支給されたが軍靴の大きさが左右違うことである。軍隊では足に合った靴を履くのではなく、足を靴に合わせろというのである。また下着はパンツではなく褌である。私はパンツを履いていたが褌は持つ

ていなかった。やむを得ず、同時の営の隣にいた戦友から褌を借りて着用した。

軍隊では喇叭うっぱの合図で起床し、食事し、就寝するので、喇叭の合図のある以前から準備しては命令に反することになるという。従って起床と同時に着装し、点呼場に到着順に整列する。遅い者は営庭を駆け足をさせられた。そのため靴紐を結ばず駆けて行き、並ぶ場所を確保してから紐を結ばないと順位が遅れて駆け足をさせられることになる。これで機敏性を養うことと同時に要領を自然と覚えさせられたのである。

軍隊へ入り先ず覚えなければならぬのは「軍人に賜りたる勅諭」である。これは必ず暗唱しなければならなかった。軍隊には教育資材がある。教範・教典などの書籍がある。

不動の姿勢という基本の姿勢があり「気を付け」の号令で、日も身体も絶対に動かすことの許されない厳粛な姿勢である。

「上官の命令には絶対に服従しなければならない」、

これの悪用により理不尽な古兵、上級者から無理を強要されたことは、皆が体験したことであろう。上官に対してはどこでも敬礼しなければならなかった。

身の回りの持ち物は常にきちんと整理整頓して、手入れをして所定の場所に置かなければならなかった。夜勉強したくても便所以外は電灯がなく、便所の電球は、まさに螢の光同様であった。

このように、未経験の厳しい軍隊生活の基本を叩き込まれながら、数日にして仙台の原隊を出発し、列車で下関へ、船で上海へと向かった。夜間航行であるから外は何も見えない。明け方上海の港が見えてきた。今まで、日本以外に行ったことのない我々にとって、外国に初めて上陸する期待感で胸が躍る思いであった。

港に到着し、浙江省杭州南方の金華を経由し、任地童村に向かう列車が待っていた。建物も看板も人々の服装も言葉も総てが日本と違う。この情景に接し異国に來たという実感が湧いた。歌で聞いた霧にけぶるガーデンブリッジという橋も、上海の街並みも印象深く

心に残ったのである。上海から汽車に乗り、金華、杭州まではさほど時間がかからなかったような気がするが、下車して童村の部落までは徒歩の行程であった。

兵舎は中国の集落にある土壁造りの民家風のものであった。寝台も土壁を積み重ねて作られた台に藁を敷き、その上に藁布団である。窓は壁に四角く開けられ、内側に障子戸がかけられていた。灯りは菜種油である。

班長室もあって、夜間の点呼は室内で行われていた。到着時、交替兵が來たと喜んで迎えてくれた古年兵も次第に厳しい内務教育をするようになってきた。食事の量は十分に補給されていたが、米飯はなく、主に「すいとん」と呼ばれる小麦粉で作られた雑炊が主食であった。

たまに食事抜ききの野外訓練が行われたが、その時、畑に作られていたまだ青いトマトの味の美味さは今でも忘れることが出来ない。日曜日はあったが兵器の手入れ、身の回りの洗濯、教範の勉強で暮れてしまっ

た。

昭和十八年一月五日から五月末まで現地金華県董村で幼年兵の集合教育を受け、一期の検閲も無事済ませることができた。砲兵は歩兵と異なり特殊な教育もあり、砲の操作、弾薬の運搬、更には観測など、肉体的にも、学問・技術的にも苦勞を重ねたのである。

六月一日、幹部候補試験に合格し集合教育を受ける。いよいよ将校生徒としての教育で、その責任の重大さを身をもって感じた。十一月三十日、集合教育終了、十二月一日付、陸軍軍曹となり北支保定陸軍予備士官学校に入校した。将来の将校としての、観測、通信、専門の指揮班の教育を受けたのである。

この教育の期間中での忘れることの出来ない思い出は、早朝起床すると馬の手入れに取りかかる。それが終わって飼付をすると自分自身の洗顔となる。その洗顔は、馬が飲むための長いコンクリートの水槽の水でするのである。十二月の北支は寒い、冷たい水を割っての洗顔であった。

また、もう一つの忘れ得ぬ思い出は、消灯後、隣の

戦友と笑いながら話をしていたら、そこに週番士官の巡察があり、戦友と二人週番士官室に連行され、「消灯後に話をしているとは軍規に違反する」と、下着のままコンクリートの防火用水槽に五分間首まで入れられた。自分にも厳寒二月の冬の夜であった。このように、将校生徒としての見せしめのための厳罰である。これは一生忘れられない体験であった。

学校での教育、特に砲兵科の学習は厳しい。毎週土曜日は学習した科目の試験が行われ、それが成績の序列に影響するのである。このようにして昭和十九年十一月三十日、同校を卒業して見習士官となり、十二月一日、独立山砲兵第一大隊に配属された。昭和二十年一月五日、東京世田谷区三軒茶屋にある近衛野砲兵隊に出向を命ぜられ、二月十五日、陸軍少尉に任官した。

昭和二十年四月二十日、北支独立山砲兵第一大隊（仁第一四八五部隊）に復帰し、予鄂作戦参加の準備をした。その編成表を見て、今まで指揮小隊長として

幹部候補生、特に予備士官学校で、観測、通信、敵状搜索等の第一線活動の教育を受けてきたのに、弾列の小隊長では自分の能力が出せないことになる。私は苦悩した。しかし、軍隊は上司の命令には絶対服従の掟がある。私はその掟を破って直屬上官に直訴をし、私としてはこの編成に異議があることを申し上げた。その結果、編成は修正され、私の考えが入れられ指揮小隊長の部署となった。

作戦開始は、昭和二十年四月二十四日であった。私に配属された乗馬は栗毛で鼻に白い縦の絞りが通り美しい馬であった。観測班長は軍曹で観測の優秀な技術者であったし、当番兵も上等兵が就いた。通信班長は伍長で部下の指揮掌握が優れていた。器材班長には兵長が就いた。部隊は初日から中国大陸を西へ西へと進出した。街や住宅はなく、闊葉樹の茂った広大な原生地である。道は細い草の生えた道で人馬がやっと通れる程度であり、所々に倒木が横たわり回り道を余儀なくされる。日没後も行進は続く、目指すは西安の牙城である。

晴天であろうが雨天であろうが寝る時は軍装そのままである。腹の上に草木の葉を被せて眠る。家も何も無い草木地の野営の連続である。大雨の夜は馬の腹の下に寝ることもある。馬の小便が冷たい軍装の上から、暖かい保温水となって心地よい。天気になればそのまま乾燥してしまうので不自由もなかった。

四月下旬に出発して五月、六月と行軍だけが続く。戦闘になれば停止出来るのだと思うが、我々は砲兵隊なので、前方で我が軍の歩兵、機関銃部隊が敵を追い払って前進するのでこの状態の連続なのである。

六月のある日の夕刻、進行中乗馬が落鉄（馬の蹄鉄が取れてしまう）して跛行しだしてとうとう歩行出来なくなった。早速前方編隊に「落鉄修理をして前進する」と連絡し、当番兵が修理にかかったが道具もないので、路傍の石で叩いて釘を直して鉄蹄を装着するのだがなかなか手間取って出来ない。

そのうちに日は沈んで暗くなってしまった。周りは暗闇となり人影すらない。灯りをとせば敵の日標となり機関銃や砲撃の標的となるので、暗夜の中での作

業である。何とか装着出来たが、馬と二人の兵士だけで前進するのは極めて危険である。敵は後退しながらも我が軍を包囲しているのだ。

遠方より人の声が聞こえるが敵かも知れない。前進しないで我が軍の後方部隊の来るのを待った。二時間程過ぎた頃、後方から機関銃隊がやって来た。早速事情を話して前方の我が部隊に無線連絡し、状況報告と機関銃部隊と行動を共にすることを連絡し一件落着くことができた。三日後、我が部隊の現在地を無線で確認し合流した。戦闘ではないが二度とない思いの一つである。

七月に入って敵との接触が頻繁となり戦闘状態が継続するようになった。山岳地に観測地を設け敵状捜索中、観測鏡の胴部に銃弾を受け撃ち抜かれたが、幸いにして人員に被害はなかった。しかし、四、五日後、私の近くに無線兵二人を位置させ敵陣地の距離測定中、米軍戦闘機の機銃掃射に遭い、無線兵一人を戦死させてしまった。その折、私の脱いでいた鉄帽も弾丸

を受け穴が開いてしまった。敵の機銃は口径が大きく、体に当たれば出血多量で即死することが多い。私の命は脱いでいた鉄帽が代わりに犠牲になったわけであった。

戦闘はいよいよ激しくなり、敵弾は雨・霰の如く、文字通り弾丸雨飛である。その中での陣地移動となり新陣地に向かう。その途中乗馬が狂奔し極秘の図面を落下してしまい、下馬して土地の地図を拾い上げ事無きを得た経験も忘れ得ぬことで、今だに思い出す。

その後、夜間になるにつけ戦闘の銃声も少なくなつたので私は山の窪みに横たわり、腹に草をかけて仮眠の最中、敵の迫撃砲弾がすぐそばに落下したが、幸いにも不発であったので命拾いすることができた。万一爆発していたら、私の体は吹き飛んだか、全身破片創となり重傷のため再起することは出来なかつたであろう。生死は文字通り紙一重の差であることが戦場の習いである。

今回の作戦進撃中、様々な悲惨な状況を目撃した。

なかでも悲惨に思ったのは、敵兵の死体が野晒になっていることであつた。家族もいたろうし戦友も上官もいるのに、死体の収容がされずそのままにされていた。日本兵の戦死者については、身体は丁重に土葬し、あるいは荼毘に付し、その遺骨は本人使用の飯盒に収集し、戦友が携行、後日日本の遺族に渡すのがならわしになつてゐた。

戦闘が小止みになり太陽が大地を照らす頃小休止をすると、近くに香りの良い名も知らぬ花が咲いている。故郷で遊んだ子供の頃、学校へ行き帰りの野道の花を見たことを懐かしく感じ、戦場での一時を楽しんだことが今でも思い出される。

七月中旬、我が部隊は山岳地帯に入り完全に敵に包囲され、後方よりの食糧供給もされず、連絡も封鎖されてしまった。食べる物は何も無くなつたが、天の助けか野原一面に、日本名でアカザという野草が繁茂しており、この新葉部分を摘み採り、飯盒で煮て岩塩で味付け、朝・昼・晩三食空腹をしのいで生き延びたのであつた。

七月中旬から八月の終戦までの約一カ月間、毎回、ほとんどこの様な食事だけで生き続けた。人間はいざとなると何でも食べて生き続けることが出来るという貴重な体験をしたのである。

この頃は、何故か敵も積極的戦闘をしかけず、我々は警備のみの状態になつた。私の指揮小隊は敵に包囲されながら、周囲一帯で一番高台にある「霸王砦」と呼ばれる土塀で囲まれた所に観測機材一式と砲車班の一分隊で、山砲一門を装備し陣取つていた。

観測鏡で深い谷を隔てた向い山を見ると、敵の陣地が構築されていて、陣地間を敵兵が行き来している。観測すると距離は四、八〇〇、五、〇〇〇メートル程度であつた。我々は計測を終了しいつでも砲撃出来る準備は完了してゐた。

しかし、周囲には銃声一つ聞こえてこない。「霸王砦」から敵の陣地に通じる曲がりくねつた一条の道がある。その道を通つて敵がいつ進撃してくるかかわからない。特に夜間の急襲に備えて入口の門には不寝番を置き常に警備の完璧を期してゐた。砲兵は敵が手元に

入って来たら自衛力は弱い。零分角射撃で眼前の敵を破砕するより方法はないのである。まさに自爆寸前の戦法である。しかし、その間でも食事は例の如くアカザが主食であった。

八月十三日、突然米軍の戦闘機が低空飛行し、我が陣に銃撃もしないで何かピラを散布して立ち去った。兵士がピラを拾って来たのでそれを見ると、日本語で印刷してある。「祖国には妻や子供、老父母が皆さんの帰りを待っている」という内容で、望郷心を起こす目的のピラではあるが、「変だな」という直感がした。

八月十八日、大隊本部から伝令が来た。「八月十五日に戦争は終結した」との連絡であった。兵隊には直接的な真相を話さず、徐々に解るようになってくれという文面であった。我々は終戦後三日目に終戦を知ったのである。中国大陸での戦闘は負けていないのに、何故の終戦（その時は「敗戦・無条件降伏」という情報ではなかった）か、と我々をはじめ部下達もショックであり、不安であった。

八月十九日朝の点呼後、私は静かに、部下の動揺を避けながら戦争の終結を話した。話をする私自身も心の動揺をおさえながら、将来の不安を持ちながら、つらい思いで話をしたことを思い出す。

八月二十日、陣地を撤収し、河南大学校に集結するよう命令が伝達された。戦争最後の陣地に別れを告げて下山し、河南大学に到着したのは夕刻であった。夕食は、あの懐かしい日本の米飯であった。一カ月間、アカザを食べ続けた我々にとっては、日本の米の美味さ、ありがたさがつくづくと感じられた。一生忘れることの出来ない尊い体験である。

一週間後、八月二十七日各編成部隊は河南大学を去って、準備された集落へと移動させられた。我々の部隊は農村風の空き家で集落を形成している所へ移動した。そこで、兵器の徴集（武装解除）が実施された。将校のみは帯刀、拳銃の所持が許可された。また週間計画による道路の補修工事が業務として示され、一般は使役従事した。

九月一日付、私は中国軍教育担当士官として中国軍（蔣介石軍）に派遣を命ぜられた。今まで敵味方で戦争をした相手の中国軍に単身勤務することは不安であった。しかし、命令されれば断ることも出来ず、早朝迎えに来た中国軍の将校と共に自動車で中国軍部隊に到着した。それぞれの部署を回って、通訳付きで挨拶を終えた。将校室兼の個室が与えられ帯刀、拳銃の所持も許可された。

食事は中国の軍隊食で、中国将校室で一緒に取った。夕食時には私の歓迎会が将校約十五、六人で開催され、浦島太郎が龍宮城へ来たような接待を受け、かえって面映ゆい思いで恐縮した。

九月二日、三日と教育の打ち合わせを実施し、週間計画を作成し、日本軍から接収した観測器材の使用法等についての教育を中心として、日本の教範による軍事教育訓練に臨んだ。通訳付きで教育したのであるが、中国の軍隊は日本から見ると非常に温和な感じを受けた。しかし、礼儀作法は日本のように厳しさがないうようであった。

九月から、日本に帰還する昭和二十一年四月十日までの七カ月間にわたって、戦闘教練までの課目を通り計画に基づいて実施した。その間、月に二〜三回、土曜日の午後には中国将校は私を誘って中国の繁華街で飲食の機会をしてくれた。中国は日本より早く宗教文化等が進んでおり、日本は後進国であるのに日本の先進性を誉めてくれ、戦争中の敵味方であった感じは全く見せなかったことには感心させられた。

両者間の話の内容は、日本の天皇制などについても彼等の理論を話したり、日本の軍隊の優秀性や大和魂などの言葉についてもよく知っていた。中国の将校は皆大学卒で入隊していて、知識や理論が豊富であると感じられた。今後の中国と日本との関係についても、政治的、政策的な理論を話してくれ非常に参考になった。

私が任務を終了して日本に帰還することになった時盛大な送別会を催してくれ、出来るならば、このまま中国軍隊に残ってもらいたい旨要請されたが、私は日本の老家族を考えると残るわけにいかないと話をし

た。

三年三カ月に及ぶ軍歴の中で、色々と貴重な人生経験を得た。この体験は終戦後より現在に至るまでの自らの長い人生の中に人生哲学として残っている。私の人生は、軍歴によって方向付けられ、その得難い貴重な体験に基づく人生観、人生理念が信念という強固な形となって確立され、自らの行動を律しながら、静かな波の上を進んでいる姿そのものである。

私の人生は既に晩年となったが、残された人生を心の中に確立された信念を貫き通して、生涯を終了したいと念願しているのが今日この頃である。

【解説】

北支独立山砲兵第一大隊は、昭和十九年二月十五日（昭和十九年軍令陸甲第十一号）編成下令、同編成完

結

編成地 中華民国河北省石門

編成管理官 第一百師団長 陸軍中將 林 芳太郎

編成担任官 北支那砲兵下士官候補者隊長

陸軍中佐 新田 正義

編成要員は主として左記部隊差出による

北支那砲兵下士官候補者隊、山砲兵第二十九連隊、野砲兵第五十六連隊、野戦重砲兵第五連隊補充隊、北京兵事部（現地召集者）

部隊行動の概要

昭一九・四・一九～五・二四 河南作戦参加

五・二五～六・一六 靈宝地区会戦参加

六・一七～七・一六

西部河南省戡定作戦参加

昭一九・七・一八～昭二〇・三・一二

河南省洛陽県竜門街付近の警備

昭二〇・三・一三～七・二〇 予鄂作戦参加

昭二〇・八・一五～昭二一・三・二七

河南省鄭州に集結し復員準備

昭二一・四・九 上海出帆

四・一五 佐世保上陸

四・一六 復員完了

兵力 編成当時 一、二一七人  
復員人員 一、〇六三人  
編成以来の死没者 一〇四人  
生死不明者 五人

## 支那事変で決死隊

### — パシ—海峽で海没—

岡山県 片山定治

明治四十一年十月二十四日、岡山県御津町（現在岡山市）で生まれました。兵隊検査では甲種合格、当時甲種は余程体格が良くないとなれなかったのですから、自分でも自信を持った丈夫な体でありました。そのためか、今日九十歳を超したのに虫歯も無く元気で過ごしています。家は農業（米作）で、私は三人兄弟の長男でありました。

現役入営は昭和四年一月、岡山の歩兵第十連隊で、同年兵（七十人ぐらい）は一個班十九人程度で六個班

あったと記憶しています。教育は厳しいものでしたが、体力、気力もあり何とか持ちこたえて一期の検閲も終えることが出来ました。当時は平時でもあり、軍縮時代でもあったのか、満二カ月にならない昭和五年十一月に現役を満期除隊することが出来ました。

その後、昭和六年九月に満州事変が勃発し、私の入営していた第十師団が満州へ応急派兵するようになったらしく、いよいよ、戦時態勢へ移っていったのでしよう。除隊した私達も、いつ召集があるかもと心の隅で思っていたものです。しかし、事変も治まり、私も家業に精を出し、後に会社（日本生命）勤めをし、結婚もして平穩な暮らしをしていました。

この平穩な生活も破れる時が来ました。昭和十二年七月七日、支那事変勃発。その七月、私にも岡山連隊に入隊すべく召集令状が来ました。いよいよ来るべきものが来たと覚悟を決め、妻子を残して歩兵第十連隊へ入隊。その時は、事変勃発で召集兵が多く、部隊を編成して現地へ出発して行きました。あの時、我々兵隊は皆元気で張り切っていました。家族を残していま